

差別問題から存在の尊さを考える

2016年7月、相模原障がい者施設殺傷事件が起きました。19人の死亡が確認され、26人が重軽傷を負いました。植松聖容疑者は園職員に「重度障がい者は生きていても仕方がないので、安楽死させた方が良い」と話し、衆院議長宛ての手紙に「障がい者は不幸を作ることしかできません」と書いたと報じられています。人に必要とか不要という価値を認定するという発想はなぜ起こるのでしょうか。

また、国会ではいわゆる改憲勢力が衆参両院の3分の2を超えました。基本的人権の制限から改憲は発議されるのではという推測があります。さらに、2015年の自殺者数は23,971人、児童相談所への虐待通告件数は37,020件です。高齢者への虐待も頻発しています。これまで自明にしてきた「人権」や「人は生まれながらに尊い」という理念が大きく揺らいでいるのを感じます。

評論家、芹沢俊介さんは「家族という意志—よるべなき時代を生きる（岩波新書）」の中で、こうした諸事象を「極度にアノミー化した状態にある社会」と押さえ、不安の時代に生き延びていくための居場所としての新しい家族の可能性を探っています。浄土真宗と対話を重ねてきた芹沢さんのお話を拝聴し、私たちは仏教徒として何をもって「いのちは大切だ」と言えるのか、言えないのか、話し合いたいと思います。

※アノミー（英: 仏: anomie）は、社会の規範が弛緩・崩壊することなどによる、無規範状態や無規則状態を示す言葉。

【日時】 2016年12月13日（火）

【会場】 富山東別院 1階研修ホール

【講師】 芹沢俊介氏（評論家）

【日程】 13:30 受付開始

14:00 開会式

14:10 講義（休憩含む）

16:00 質疑応答

16:15 閉会式

【参加費】 500円

